

随泉寺寺報

平成20年(2008年)1月号 第449号

082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

御正忌報恩講法座

講師 住職自修

講題 『ご伝鈔について』

ごあいさつ 老院 鎌田 不動

あけましておめでとうございます

平成20年の新しき年を迎えて門信徒の皆様と共に、今年も御報恩の日々を歩みたいと思います。

今年の私の座右の聖語は「聞思莫遅慮」と致しました。親鸞聖人の主署「教行信」の総序のご文です。「撰取不捨の真言 超世希有の正法 聞思して遅慮すること莫れ」

お念仏一南無阿弥陀仏は撰取して捨てないまことの言葉であり、世に超えた希有の正しいおみのりでありますから、如来さまのお喚び声を「聞」(聞くこと)の次に「思」(考えること)があります。遅慮するとなかれとは「聞」くことが「恩」と共に私の「信心」となり「お念仏」となって口に称名、体に合掌の相(すがた)が表現され、御恩報謝の日ぐらしとなって下さる。要する所、聞思しての心は「聞く」ことは、「耳で聞く」ことのみではなく「身体と心で聞くこと」であると親鸞さまは教えて下さっていると、私は受け取っています。「教行信証」は目で読む書でなく「目」で読むより前に「耳」で聞くことが大事だということが「聞思」しての「聞」の意味だと思っています。

1月の法座予定

- | | | |
|-------|-----------|----------------------|
| 1月13日 | 掃除 | 平原東 |
| 1月14日 | 昼席午後1時より | 御正忌法恩講 |
| 1月14日 | 夜席午後7時より | 御正忌法恩講 ご伝鈔上巻拝読 |
| 1月15日 | 朝席午前10時より | 御正忌法恩講 ご伝鈔下巻拝読 おとき |
| 1月15日 | 昼席午後1時より | 御正忌法恩講 ご俗抄拝読 |
| 1月15日 | 昼席終了後 | 新年互礼会 |
| 2月 2日 | 午後6時より | 門信徒会本部役員会 |

年頭にあたって

門信徒会会長 平岡周三

初春にあたり、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

昨年の中を象徴する漢字に選ばれた「偽」は大手や老舗の食品の、偽装や、政治に対する問題等が反映されたとありました。清水寺の森 清範貫主は「こういう字が選ばれるのは本当に恥ずかしく、悲憤に堪えない」と述べられました。その通りだと私も思います。ま田、福沢諭吉の『心訓』の一つに、「世の中で一番悲しいことは嘘をつくことです」とあります。人生は深い縁の不思議な出会いで結ばれており、「おかげさま」がなくなるとすべてが「あたりまえ」になってしまいます。

平成19年度門信徒会の事業計画に掲げております「1年に1度は家族揃ってお寺に参りましょう」をスローガンとしておりますが、自分で納得した生き方はなかなか出来るものではないと思います。

私たちはこの世に生かされて、その与えられた命の中で、自分自身が何を大切に生きていけばよいのかを考えたとき、まづ、お寺にお参りして、法を聞くことが大事だと思います。本当の教えである仏の道をお示し下さった「歎異抄」は、浄土真宗の教えを易しく説いてあり、「本願を信じ念仏申さば仏になる」と言っておられるのです。本当のことは何もわかっていない、愚か者の私ですが、この世に生かされていることを感謝しつつ、後生の一大事を心にかけて、皆様のご協力とご指導を賜り、今年も精進してまいりたいと思いますので、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

終わりにになりましたが、お念仏繁昌と皆様のご健勝を心から念じまして、ご挨拶といたします。

迎春

随泉寺修徳仏教婦人会会長 太尾田 道子

新年のお慶び申し上げます。慈光照護のもと、お健やかに念仏ご相続のこととお慶び申し上げます。

昨年中は随泉寺門信徒会修徳仏教婦人会活動には、いろいろとご協力、ご尽力、まことにありがとうございました。過ぎ年、世の中さまざまの事件や問題がたくさんございました。平成20年、親鸞聖人のおことばに「世の中安穏なれ、仏法弘まれ」(ともにかがやく世界へ)とあります。『仏教婦人会綱領』私たち仏教婦人は真実を求めて生き抜かれた親鸞聖人のみあとをしたい、人間に生まれた尊さに目覚め、深く如来の本願を聞きひらき、み法の母として念仏生活にいそしみます。」とあります。

仏法に会い、私どもを導いてくださる如来様のお恵みの中に生かされて、お念仏申させて頂くよろこび、いただいたいおのちの尊さ、手を「あわせ」お念仏申す嬉しさ、おかげさま、ありがとうと申すことの出来る幸せを皆様方とご縁を頂き、ともに聴聞させていただけることを、とてもうれしく思っています。明るい一年でありますよう、ご法儀ますます繁盛をを念寺、御恩報謝の日暮らしを心がけ過ごさせていただきたいと思っております。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。合掌



祖父 門前貞彦を偲ぶ～

私の祖父、門前貞彦が亡くなってから既に14年が経ちますが、私はおじいちゃん子であり、またおばあちゃん子であったため、今でもはっきりと祖父と祖母が熱心に仏壇の前に座ってお経を唱えている姿を思い浮かべることができます。実際に今こうして筆を取っていてもその姿が目には浮かび、目頭が熱くなるほどです。

私の祖父は、明治34年に旧押込村(呉市)で代々庄屋を勤めた梶山家の三男として生まれました。祖父が5歳の頃、腸チフスが流行し、家族のほとんどが亡くなり、残されたのは、祖父と祖父の兄の二人だけとなりました。そのことを伯父に当たる門前太三郎(養蚕の奨励振興、養蚕組合長)が不憫に思い、まだ幼い祖父を養子として門前家に引き取りました。その後、祖父は、太三郎の一人娘であったフサエと結婚し、大正12年から終戦の年まで旧国鉄で働き、広島駅で執務中に被爆しました。退職後は村議会議員をはじめ、自治会長、町文化財保護審議会委員、農業共済組合長、消防団分団長、農業委員、ぶどう組合長、民生委員など様々な要職を歴任し、生涯を通して地域の発展のために力を注ぎました。



また、随泉寺においては、かつて、本願寺が門信徒会運動を提唱し、随泉寺が率先して取り組んで組織した際の初代門信徒会長となるなど約50

年にもわたり随泉寺の責任役員を務めるとともに、仏教の教えに基づく幼児の健全な心の発達を願い、中野めいわ保育園の設置運営にも微力を尽くしたと聞いています。

このように皆様からいただいた甲辞や過去の資料等を基に祖父の経歴を改めて紐解いてみると、家族でありながら、正直、よくここまで地域やお寺のために情熱を持って献身的にやってこられたものだと感心しました。もちろん周囲の人々に恵まれていたからこそ可能だったのでしょう。

祖父は、困った人がいれば自分がいくら損をしてでも人を助けようとするところがあり、また温厚で誰の話でも親身になって聞くことから、毎日のように人が相談に訪れていたのを今でも覚えています。私にとって普段の祖父は、ただの「おじいちゃん」でしたが、長年にわたり地域の人々に慕われ、今でも祖父を懐かしむ声を聞くと、本当に祖父は幸せな人で、孫の私から見ても徳の深い人だったように思います。その一方で今の自分がいかに小さな存在であるかを痛感させられます。

さて、私の家には樹齢400年と伝えられる大きなイチョウの木があります。祖父は自分のこととなると本当に無欲な人でしたが、このイチョウのことだけは気がかりだったよ

うで、今から約20年前に私は、祖父から市天然記念物にならぬものかと相談を受けたことがあります。同程度かむしろやや小さめのイチョウが市天然記念物に指定されていることもあり、これまで何度か市教育委員会にお願いしてみましたが、残念ながら現在のところよい返事はいただけていません。何とかして祖父の願いを叶えてあげたいと思っています。



ところで、浄土真宗の教えのことでよく祖父や祖母が口にしていたことがあります。それは、「人間は愚かな存在であるから自ら阿弥陀仏のはたらき(南無阿弥陀仏)を信じることはできない。信じさせていただくものだ。私たち夫婦は、凡人だから何十年もかけてようやく信じさせていただいた。誰しもいずれ死ななければならないときが必ず来るのだから、迷いの世界にいきたくないのであれば、お前もお説法を聞きなさい。」また、「葬儀は、故人のためにあるのではない。遺族や縁故者が故人を偲びながらお念仏を唱え、尊い仏縁に遇うためのものだ。だからお前もただ悲しむだけでなくそのつもりで、葬儀にお参りしなさい。」

また「仏様がこの世の中に時々お出になり、我々凡人のために、演技をされることがある。」という話を聞いたことがあります。いくつかあって私もはっきりと記憶しておりませんが、一例として一休さんと蓮如上人のことを挙げていたのを覚えています。ある時、一休さんが「阿弥陀にはまことの慈悲はなかりけり 頼まぬものはたすけたまわじ」と蓮如上人に問われると、すかさず、蓮如上人が「武蔵野の葉ごとに月は宿れども 露なき草に月は宿らじ」と歌を返されたというお話です。このことは、大変ありがたいお話であり、同時に一般社会でも通じる話なので、今でも強く印象に残っています。



また、祖父母は、二人で普通の会話をしているにもかかわらず直ぐに話題が仏様の話になり、いつも仏様のことばかり考えているようでした。そのため私との会話でも、一旦仏様の話を始めると、何時間でも話し続けるという状態で、私もできる限り聞くようにはしていましたが、時々、話を聞くのが面倒くさくなって話題を変えようとしたのを覚えています。今にして思えば、祖父母の気持ちが分からずに、大変、申し訳なく馬鹿なことをしたと後悔しています。普通の家庭ではなかなか知ることができない浄土真宗の貴重な教えを身近で聞くことができ、今でも時々思い出してみても感謝したり、反省している次第です。

私は、祖父のようなことができる徳も技量もありませんが、祖父の遺志を受け継ぎ、今後、少しでも地域やお寺のお役に立てるよう精進を重ね、浄土真宗の教えに触れる時間を可能な限り増やしていきたいと考えています。

最後になりましたが、この度、本稿を書く機会を与えてくださいました随泉寺住職様に心より感謝申し上げます。

平成19年12月9日 門前 誠司